

# 2018年度「専門特殊研究」研究会一覧

文学学術院

2018年度実施の専門特殊研究会は以下のとおりです。  
「科目登録の手引き」も確認してください。  
なお、本内容はWebシラバスには掲載されていませんので、ご承知おきください。

## 【専門特殊研究について】

高度な原典購読や資料解説、数理系の問題演習など、少人数による上級者向けの研究会での成果を、学部での履修単位として認定するための科目です。

### <履修について>

- 1科目2単位とし、合計8単位を上限に卒業必要単位に算入されます。
- 年間における登録制限単位数、科目数には算入しません。
- 同一の学期に2研究会（4単位）までの単位認定が可能です。
- 入学後2学期目から卒業見込み学期の前学期まで履修することができます。
- 本研究会は科目登録の結果通知には反映されません。

### <成績について>

- 学期終了後、一定の条件を満たした研究会において、十分な成果を収めた学生についてのみ、単位の認定を行います。
- 評価は次学期の初めに行われ、実際に参加した次の学期の単位となります。
- 合格の場合、成績証明書には、「専門特殊研究（主題・担当教員名） 配当年度 配当学期」と記載します。

★各研究会の内容に関するお問い合わせは、以下の担当教員まで直接お問い合わせください。

(以下、学期・曜日・時限・主題名五十音順)

春学期

火

6時限

実施曜日・時限  
の特記事項

参加可能年次

2年以上

主題

ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』  
をポルトガル語でよむ

担当教員

伊川 健二

## 研究概要

主題に記載の文献を原語(ポルトガル語)で読む。適宜邦訳を併用する。形式は輪読を想定している。現時点でポルトガル語学習経験があり、当該期の日本関係史料の原語での研究を希望する学生、もしくは現段階では十分な知識・経験がないが将来的に当該領域の研究を志す学生からの積極的な応募を歓迎する。ポルトガル語の学習経験がない受講者がいる場合は、語学の解説を補助的におこなう。その他、受講者の関心により、他のテキストの輪読や、南欧における日本関係史料情報の共有をし、初歩的な補助の機会が少ない当該領域研究の出発点となることを意図している。

## 使用文献

Luís Fróis, *Kulturgegensätze Europa-Japan* (1958); mit deutscher Übers., Einl. und Anmerk. von Josef Franz Schütte, (*Monumenta Nipponica* 15) (Tokyo: Sophia Univ., 1955)  
ルイス・フロイス(岡田章雄訳注)『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波文庫、1991年)

## 活動記録の内容、提出方法

研究会での輪読や発言内容により総合的に評価する。

## 受講者選考方法

受講希望者は、中近世移行期の日本に関する欧文史料(使用文献以外でも構わない)への関心を簡単に述べたメールを、3月31日(土)までに伊川(igawa@waseda.jp)宛にお送りください。

## 備考

外部の研究者を交えた研究会のなかで実施するが、初歩的な解説をまじえつつ進行するので、気楽に応募して欲しい。

**春学期****木****3時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

2年以上

**主題**

世阿弥の芸談を読む

**担当教員**

竹本 幹夫

**研究概要**

世阿弥の芸談『世子六十以後申楽談儀』を読む。本書は世阿弥の息男秦元能が、永享二年(1430)十一月に、自らの出家にあたり、それまでに受けた父世阿弥の薫陶の数々を聞き取ったメモを編集し、芸道になおざりでなかった証拠として父に捧げた一書である。中世芸能記録の宝庫とも称され、同時代の能のあり方を具体的に知りうる、貴重な記事に富んでいる。

**使用文献**

岩波文庫『申楽談儀』(表章編)、もしくは『世阿弥 禅竹』(表章編。岩波書店『日本思想大系』所収。単行本としても刊行された)。

**活動記録の内容、提出方法**

評価はレポートと平常点による。各自に適宜章段を分担してもらい、輪読形式で発表してもらいながら、講義する。それを踏まえた発表内容をレポートにまとめてもらう。

**受講者選考方法**

多人数の場合のみ面接を行うが、原則的に希望者はすべて受け入れる。希望者は授業初日に竹本研究室(39-2507)に来ること。

**備考****春学期****木****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

2年以上

**主題**

和歌テキスト原典講読1(新古今研究会)

**担当教員**

兼築 信行

**研究概要**

主として平安から鎌倉期の和歌に関する原典を、輪講形式で読解していく。何を読むかは参加者との相談により決定するが、2017年度春学期は百人一首古注、秋学期は水無瀬恋十五首歌合を取り上げた。学部生のみならず大学院生も参加し、所属も文学学院傘下の学部・研究科だけでなく、他大学の学生・院生が参加する場合もある。和歌に関する基本的な調査方法や研究方法は、初歩から教授するので、まったくの初心者でも心配はならない。和歌は日本文化を考えるうえで基軸となるものの一つであり、専門的な知識、研究方法を習得することは、極めて重要であると考えられる。

**使用文献**

テキストはすべてプリントで用意し、参加者に配布する。

**活動記録の内容、提出方法**

毎週輪読会を開催する。評価は、輪読への出席状況と、議論への参加、また担当和歌や箇所についての発表(最低1回)をもって行う。輪読のほか、和歌に関する展示等への参観を実施する場合もある。

**受講者選考方法**

担当教員宛に参加申し込みのメールを送ること(knck@waseda.jp)。その際には、和歌に関する自身の関心について述べ記して欲しい。原則として、参加希望はすべて受け入れる。

**備考**

**春学期****無****その他****実施曜日・時限の特記事項** 履修者と相談して決める**参加可能年次**

2年以上

**主題**

中国近現代文化の諸問題

**担当教員**

千野 拓政

**研究概要**

中国近現代文化に関する諸問題について、参加者が自分でテーマを決めて、研究を進める力を養成することを目的とする。各学生の興味を持つテーマがそれぞれ異なるため、参加者が自分が興味を抱いているテーマについて毎回交代で発表し、全員でそれについて討論することを通して各自のテーマを深めていく方法を取る。発表の際に使用する資料はあらかじめ提示し、参加者全員が目を通してることが前提となる。授業ではその読解、問題点の提示、不明な箇所の確認を行うとともに、発表者のコメントについて討論を行う。そうした作業を通じて、通常の授業では扱えない原文資料の読解、吟味、検討を進める力を養い、学生の研究能力を高めることを目指す。(すでに2012年年度秋期から勉強会の形で毎週実施しているが、学生が継続して実施することを強く希望していること、学年を越えて参加を希望する学生がいること、また学生の準備にかける負担がかなりあることなどを考え、専門特殊研究として実施することを希望する。)

**使用文献**

一巡目は発表者が毎回準備する。(2巡目移行は状況を見て、場合によっては教員が指定する)

**活動記録の内容、提出方法**

毎回の発表ならびに学期末に提出してもらう研究活動報告によって評価する

**受講者選考方法**

第1回目の授業で自分の興味あるテーマとその研究について簡単なプレゼンテーションを行ってもらい、判断する。

**備考**

中文コースの科目がクォーター制に移行し、クォーターによって受講者の時間割が変わる可能性があるため、開講時間は受講者と相談して決める。

**春学期～秋学期****火****7時限****実施曜日・時限の特記事項****参加可能年次**

2年以上

**主題**

満洲語文献講読

**担当教員**

柳澤 明

**研究概要**

清代前期(17～18世紀)において、満洲語は清帝国全体の公用語であり、とくに八旗と内陸アジア地域(東北・モンゴル・チベット等)に関しては、その重要性は漢語よりはるかに高かった。したがって、清代の歴史・文化を多面的に検討していくためには、満洲語の読解力が不可欠といえる(清朝最後の皇帝であった溥儀も、晩年「清史の研究には満洲語が不可欠だが、残念ながら自分は詳しくない」と語っていたという)。今年度は、清代前期の東北(満洲)地域に関する文書史料を講読していく予定。なお、初学者は満洲語の文字・文法等に関する基礎的なレクチャーを受けた後に、講読会に参加することになる。

**使用文献**

「寧古塔副都統衙門檔案」(予定)

**活動記録の内容、提出方法**

輪読形式でテキストを読み進めます。15回終了時点で、テキストの転写と和訳(各人の担当部分だけではなく、当該期間に講読したテキスト全体)、およびテキストの内容に関する簡単なレポートを提出してもらいます。

**受講者選考方法**

受講希望者は、4月10日(火)または17日(火)の7時限(19:55～)に、柳澤研究室(39号館4階2415)に来室してください。面談により受講者を選考します。

**備考**

原則として隔週開講とし、通年で計15回行います。受講者の授業スケジュール等に応じて、曜日・時限を変更することもあります。

**秋学期****火****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』  
をポルトガル語でよむ**担当教員**

伊川 健二

**研究概要**

主題に記載の文献を原語(ポルトガル語)で読む。適宜邦訳を併用する。形式は輪読を想定している。現時点でポルトガル語学習経験があり、当該期の日本関係史料の原語での研究を希望する学生、もしくは現段階では十分な知識・経験がないが将来的に当該領域の研究を志す学生からの積極的な応募を歓迎する。ポルトガル語の学習経験がない受講者がいる場合は、語学の解説を補助的におこなう。その他、受講者の関心により、他のテキストの輪読や、南欧における日本関係史料情報の共有をし、初歩的な補助の機会が少ない当該領域研究の出発点となることを意図している。

**使用文献**

Luís Fróis, Kulturgegensätze Europa-Japan (1958); mit deutscher Übers., Einl. und Anmerk. von Josef Franz Schütte, (Monumenta Nipponica 15) (Tokyo: Sophia Univ., 1955)  
ルイス・フロイス(岡田章雄訳注)『ヨーロッパ文化と日本文化』(岩波文庫、1991年)

**活動記録の内容、提出方法**

研究会での輪読や発言内容により総合的に評価する。

**受講者選考方法**

受講希望者は、中近世移行期の日本に関する欧文史料(使用文献以外でも構わない)への関心を簡単に述べたメールを、9月30日(日)までに伊川(igawa@waseda.jp)宛にお送りください。

**備考**

外部の研究者を交えた研究会のなかで実施するが、初歩的な解説をまじえつつ進行するので、気楽に応募して欲しい。

**秋学期****木****3時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

世阿弥の芸談を読む

**担当教員**

竹本 幹夫

**研究概要**

世阿弥の芸談『世子六十以後申楽談儀』を読む。本書は世阿弥の息男秦元能が、永享二年(1430)十一月に、自らの出家にあたり、それまでに受けた父世阿弥の薫陶の数々を聞き取ったメモを編集し、芸道になおざりでなかった証拠として父に捧げた一書である。中世芸能記録の宝庫とも称され、同時代の能のあり方を具体的に知りうる、貴重な記事に富んでいる。春学期の継続で、同書の後半分を読み進める。

**使用文献**

岩波文庫『申楽談儀』(表章編)、もしくは『世阿弥 禅竹』(表章編。岩波書店『日本思想大系』所収。単行本としても刊行された)。

**活動記録の内容、提出方法**

評価はレポートと平常点による。各自に適宜章段を分担してもらい、輪読形式で発表してもらいながら、講義する。それを踏まえた発表内容をレポートにまとめることとする。

**受講者選考方法**

多人数の場合のみ面接を行うが、原則的に希望者はすべて受け入れる。  
希望者は授業初日に竹本研究室(39-2507)に来ること。

**備考**

**秋学期****木****6時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

和歌テキスト原典講読2(新古今研究会)

**担当教員**

兼築 信行

**研究概要**

主として平安から鎌倉期の和歌に関する原典を、輪講形式で読解していく。何を読むかは参加者との相談により決定するが、2017年度春学期は百人一首古注、秋学期は水無瀬恋十五首歌合を取り上げた。学部生のみならず大学院生も参加し、所属も文学学院傘下の学部・研究科だけでなく、他大学の学生・院生が参加する場合もある。和歌に関する基本的な調査方法や研究方法は、初歩から教授するので、まったくの初心者でも心配はいらない。和歌は日本文化を考えるうえで基軸となるものの一つであり、専門的な知識、研究方法を習得することは、極めて重要であると考えられる。

**使用文献**

キストはすべてプリントで用意し、参加者に配布する。

**活動記録の内容、提出方法**

毎週輪読会を開催する。評価は、輪読への出欠状況と、議論への参加、また担当和歌や箇所についての発表(最低1回)をもって行う。輪読のほか、和歌に関する展示等への参観を実施する場合もある。

**受講者選考方法**

担当教員宛に参加申し込みのメールを送ること(knck@waseda.jp)。その際には、和歌に関する自身の関心について述べ記して欲しい。原則として、参加希望はすべて受け入れる。

**備考****秋学期****無****その他****実施曜日・時限  
の特記事項** 履修者と相談して決める**参加可能年次**

2年以上

**主題**

中国近現代文化の諸問題

**担当教員**

千野 拓政

**研究概要**

中国近現代文化に関する諸問題について、参加者が自分でテーマを決めて、研究を進める力を養成することを目的とする。各学生の興味を持つテーマがそれぞれ異なるため、参加者が自分が興味を抱いているテーマについて毎回交代で発表し、全員でそれについて討論することを通して各自のテーマを深めていく方法を取る。発表の際に使用する資料はあらかじめ提示し、参加者全員が目を通してることが前提となる。授業ではその読解、問題点の提示、不明な箇所の確認を行うとともに、発表者のコメントについて討論を行う。そうした作業を通じて、通常の授業では扱えない原文資料の読解、吟味、検討を進める力を養い、学生の研究能力を高めることを目指す。(すでに2012年年度秋期から勉強会の形で毎週実施しているが、学生が継続して実施することを強く希望していること、学年を越えて参加を希望する学生がいること、また学生の準備にかかる負担がかなりあることなどを考え、専門特殊研究として実施することを希望する。)

**使用文献**

一巡目は発表者が毎回準備する。(2巡目移行は状況を見て、場合によっては教員が指定する)

**活動記録の内容、提出方法**

毎回の発表ならびに学期末に提出してもらう研究活動報告によって評価する

**受講者選考方法**

第1回目の授業で自分の興味あるテーマとその研究について簡単なプレゼンテーションを行ってもらい、判断する。

**備考**

中文コースの科目がクォーター制に移行し、クォーターによって受講者の時間割が変わる可能性があるため、開講時間は受講者と相談して決める。

**秋学期～春学期****火****7時限****実施曜日・時限  
の特記事項****参加可能年次**

1年以上

**主題**

満洲語文献講読

**担当教員**

柳澤 明

**研究概要**

清代前期(17～18世紀)において、満洲語は清帝国全体の公用語であり、とくに八旗と内陸アジア地域(東北・モンゴル・チベット等)に関しては、その重要性は漢語よりはるかに高かった。したがって、清代の歴史・文化を多面的に検討していくためには、満洲語の読解力が不可欠といえる(清朝最後の皇帝であった溥儀も、晩年「清史の研究には満洲語が不可欠だが、残念ながら自分は詳しくない」と語っていたという)。2018年秋学期は、清代前期の東北(満洲)地域に関する文書史料、2019年春学期は、清朝の対モンゴル政策にかかわる文書史料を講読していく予定。なお、初学者は満洲語の文字・文法等に関する基礎的なレクチャーを受けた後に、講読会に参加することになる。

**使用文献**

2018年秋学期:「寧古塔副都統衙門檔案」(予定)  
2019年春学期:『軍機処満文準噶爾使者檔訳編』(予定)

**活動記録の内容、提出方法**

輪読形式でテキストを読み進めます。15回終了時点で、テキストの転写と和訳(各人の担当部分だけではなく、当該期間に講読したテキスト全体)、およびテキストの内容に関する簡単なレポートを提出してもらいます。

**受講者選考方法**

受講希望者は、10月2日(火)または10月9日(火)の7時限(19:55～)に、柳澤研究室(39号館4階2415)に来室してください。面談によって受講者を選考します。

**備考**

原則として隔週開講とし、2018年秋学期～2019年春学期を通算して計15回行います。受講希望者の授業スケジュール等に応じて、曜日・時限を変更することもあります。

以 上